

第3章 薩摩博物学年表統合版

岡田雅志

防衛大学校人間文化学科

1. はじめに — 薩摩博物学年表統合版作成について

本篇は旧薩摩藩（現在の鹿児島県及び宮崎県の一部、地図参照）の領域における博物学関係の歴史事項をまとめた3篇の年表の統合を試みたものである（小文の後に掲載）。3篇の年表とは、1934年に刊行された長井實孝編「薩摩藩博物学年表」（長井 1934）（以下、長井版）、内藤喬編『薩藩の薬園と本草学』（内藤 1937）に載せる「薩藩博物学年表」（以下、内藤版）、1982年刊行の上野益三『薩摩博物学史』（上野 1982）に載せる「薩摩博物学年表」（以下、上野版）である。2019年度の共同研究報告書（岡田・柳澤 2020）において、薩摩地方のシナモン（肉桂、桂皮、同地ではケシン、ケセンと呼ばれる）を扱って以来、共同研究班では、薩摩地方の豊かな自然環境、交易を通じた開放性ゆえに、この地が薬用植物にとどまらない生物種の十字路となり、それゆえに独自の本草学、博物学が発展してきたことに注目してきた。その過程で上記の年表の存在を知り、大いに裨益させられた。ただ、各年表の間には異同や相補する内容があるため逐一照合するのに不便である。そこで、統合版を作成し、先学の成果を通覧できるようにすることで、我々の今後の研究の進展のみならず、薩摩地方の博物学、博物学史研究にも幾ばくか資するところがあるのではないかと考えた。

2. 各年表について

ここでは統合作業の対象とした3篇の年表について現在分かっている範囲において簡単に説明しておく。

① 長井版

長井版は鹿児島高等農林学校開校25周年を記念して刊行された論文集に掲載されている。鹿児島高等農林学校は1908年に設立された旧制専門学校で、鹿児島大学農学部の前身である。年表を作成した長井實孝の詳しい来歴は確認できていないが、この論文集が職員及び同窓会員の研究成果を公刊するもので

あることと、序文において長井が「本編を草するに当り、指導並に校閲の労を賜はりし、恩師本校岡島銀次教授及び文献閲覧に種々の便宜を与へられし県立、本校両図書館員に感謝の意を表する次第なり。皇紀二千五百九十四年梅花節鹿兒島高等農林学校動物学教室にて 編者記す」と記していることから鹿兒島高等農林学校出身者であることがわかる。長井の師である岡島銀次(1875-1955)は、昆虫学を専門とするが、広く博物関係の知識の涵養を重視し、鹿兒島高等農林学校博物同志会を主宰し、さらには鹿兒島県博物学会を創設した人物である(末永 1955)。長井もおそらく博物同志会のメンバーであったであろうし、博物学年表作成は博物同志会の活動と関連して行われたものである可能性が高い。長井版の序には、「郷土史を繙き、其中より抜萃したるものをここに蒐録せり」とあり、参考文献を見ると、自治体史などの二次文献の他、『島津国史』などの基本史料も博搜して作成されているようである。

② 内藤版

内藤版は、言葉遣いの異同はあるものの、長井版の内容とほぼ重複している。年表編の末尾に「以上年表は長井實孝氏の調査によるものなるが、之は尚補遺訂正すべきもの多々あるべく、後日諸賢の援助によりて之が完璧を期する次第である。昭和二年一月二十一日稿了」と記されている。いくつか長井版のみに記載のある事項(年表の通し番号 50、66、67、80、96、98、144、145)があることもあわせて考えれば長井版そのものではなく長井版の草稿に基づき作成されたものであると考えられる。内藤喬(1891-1957)は当時、鹿兒島高等農林学校植物学教室の教授であり、九州・南西諸島の民俗植物研究を専門としていた。内藤が上述の博物同志会のメンバーであったかの確認はできていないが、同校の博物学に関心を持つ人士の間で長井版の草稿が共有されていたことが窺われる。

言葉遣いの差異以外で異なる点としては、長井版は和暦、干支、西暦を併記しているのに対し、内藤版はそれらに加えて皇紀も記している(本年表においては干支及び皇紀は省略した)。また、縦書きの年表の上部に年表事項に係する物産名を記している。加えて、下部に備考欄が設けられ、同じ年に起きた日本史の重要事項について記載されている(但し備考欄があるのは1603年まで)。博物学と関係のない内容が多いが、本年表にも掲載した。

内藤版を収めた『薩藩の薬園と本草学』は未刊の手稿本であるが、広く頒布される目的で書かれたものであると思われる。本書は「本草学及薬園の沿革」「薩藩博物学年表」「附録」の3編から成っており、薩摩についての記述があるのは「薩藩博物学年表」のみで、「本草学及薬園の沿革」は日本における本草学、採薬に関する古代から江戸時代までの沿革を概述し、「附録」は『古事記』に見られる薬用植物などについて記載したものである。書名と内容とが必ずしも合致していないようにも思われるが、上野益三によれば内藤喬は本書前年に刊行された『薩藩の文化』(鹿兒島市 1935)の「第三 薬園と本草学」の筆者

であり（上野 1982: 3）、あるいは、本書は『薩藩の文化』のために準備した原稿の内、掲載されなかった内容をまとめたものかもしれない。

③ 上野版

上野版は、著名な生物学者であり、博物学史研究の第一人者であった上野益三（1990-1989）が近世から近代に至るまでの薩摩の博物学の形成と展開を論じた『薩摩博物学史』の巻末に掲載された年表である。主題に合わせて年表は 1543 年より始まり、18 世紀以降の薩摩藩の博物学の隆盛と幕末・明治期の近代動植物学の影響に関する事項が充実している。また、上野版は、島津文書などを含め各種関係史料を渉猟し薩摩の博物学史を一新させたともいえる上野の研究成果を反映した記述となっている。その一例として『質問本草』に関する記述がある。1785 年に成立した『質問本草』は薩摩から南西諸島に及ぶ地域に自生する植物各種について図譜及び中国人への聞き取りにより同定された漢名ほか、和名、効能などを記した調査記録とも言えるものである。この『質問本草』の编者について、長井版では従来言われてきた通り、薩摩藩が琉球の学士呉継志（長井版では呉継子）に依頼して作成したものとするが（年表 193）、上野版では呉継志は仮託の人名であるとする（年表 187）。その背景には、実質的に薩摩に服属していた琉球であるが、それは秘匿され清との朝貢関係を維持しており、それを利用して薩摩が密貿易を行っていたという当時の複雑な事情があったとされる。『質問本草』をはじめ、薩摩の博物学の歴史については近年高津茂によってさらなる研究が進められている（cf. 高津 2017）。

以上見てきた 3 篇の年表を統合することによって、その国際交易上の位置及び自然環境の下、生物種の十字路となってきた薩摩地方の博物学及び博物学史の豊かな研究成果を通覧することができるはずである。もちろん、これとても網羅的なものではなく（年表の作者達ももとよりそれを期していない）、例えば、動植物の伝来について、1853 年に岡山よりネズムロノキの苗を取り寄せ栽植したことについては記載がない（鹿児島市史編さん委員会編 1969: 462）。また、これらの年表は主に島津藩の関係史料に依拠したものであるが、地方史料や口碑資料の世界に踏み込めば、さらなる膨大な情報が得られると思われる。それらが即史実となるわけではないが、そうした史料・伝承の収集、分析を積み重ねることで薩摩の地域社会と生物資源との関係史を明らかにすることができる。今後こうした作業を進めていく上でも先学の成果である本年表が道標となるであろう。

3. 年表凡例

ここでは長井版及び統合版の凡例を示す（上野版、内藤版には凡例なし）。

[長井版凡例]

1. 本編にては全て薩摩藩主島津公を中心として記述したり。
2. 本編は我が薩摩藩に関する旧聞遺事、先輩の生没、本草家の往来、著述の年月、薬園の興廃、鉱石の発掘、動植物舶来の歳月、薩摩藩と幕府其他との献賜等を蒐録して、薩摩藩に於ける博物関係の一般を知らしめんとす。
3. 博物学は農林学、水産学、地理学等其他の科学にも密接なる関係あるを以て、間々其事蹟を記載せり。
4. 幕府と薩摩藩との献賜の史実は余りに繁雑に過ぐるを以て、多くは之を略記せり。
5. 本編中、大府、大御所、県（頭）官とあるは幕府を指す。
6. 薩摩藩を薩藩と略称する所少なからず、観る人之を諒せられよ。

[薩摩博物学年表統合版凡例]

1. 本表は、別個に作成された上野版、長井版を統合することを基本目的とし、両版に記載されている事項毎に年代別に統合、整序したものである。各事項には通し番号を割り当てている。
2. 表に上野、長井の欄を設け、事項毎に記載があるものに○を付した。基本的に長井版と同じ内容である内藤版については内容上の異同がある場合に注記するにとどめた。
3. 上野、長井両版の年表に共通して記載されている事項については上野版の記述を掲載した。内容上、相補う、あるいは異同がある場合には「【長】～」の形で長井版の記述も併記した。また、長井版の記述について、内藤版により追補した箇所は〔〕で括り、字句の異同を示す場合は（内：）とした。また、内藤版により訂正した箇所は（長：）として長井版の字句を記した。その他の統合作業にかかる注記は（※～）の形で記した。
4. 事項欄の記述については長井版の歴史的仮名遣いを含め原則として原文をそのまま掲載した。但し、明らかな誤字などについて修正した箇所もあるほか、検索の便を考慮し、旧漢字や一部地名については表記を改めた。
5. 内藤版のみにある備考欄の記載については「《備考》～」として事項の末尾に記した。
6. 編年について、上野版、長井版にある干支年は省略した。また、月が明記されていない事項については、元の年表の順序から時系列がわかるものは時系列の順に配列し、不明なものはその年の最後に配列した。両版に時系列不明な事項がある場合は上野版の事項を先に配列した。

4. 薩摩博物学年表統合版

	上野	長井	西暦	和暦	事項
1		○	1193	建久 4	源頼朝、其長庶子忠久を以て薩隅日三州の守護職に任じ、姓島津氏及び十文字紋を賜はる。島津家の高祖なり。《備考》富士野の巻狩、曾我兄弟仇討。
2		○	1194	建久 5	10月、本田左衛門尉貞親、瀬崎野（下出水村）に馬牧を設けて牝馬を放つ。島津家三州に馬牧を設置するの初なり。
3		○	1222	貞応 1	4月、幕府犬追物を南庭に見る。駿河前司義村検見、島津道仏公（第二代定時）申次。（※内藤は「道仏公（第二代定時）」のように諡号に括弧内にて世次及び名を補う。以下同様）
4		○	1342- 1344	康永年間	種子島野牧始まる。《備考》三年六月、征西將軍懐良親王島津貞久を薩摩に破り給ふ。
5		○	1368	貞治 7	寄田野牧を新田八幡大宮司執印左衛門大夫友雄に賜ふ。《備考》後村上天皇崩御、長慶天皇踐祚。
6		○	1393	明德 4	6月、島津怒翁公（第七代元久）幕府に書を上り、且つ酒匂新左衛門を遣して虎皮3枚、豹皮2枚、梅画4幅、料足1万匹を献ず。
7		○	1406	応永 13	島津公（第七代元久）人を遣し、朝鮮太宗の時、礼物を献じ被虜を發還し蘇木百斤を徳寿官に献ず。
8		○	1410	応永 17	島津怒翁公、幕府に白絹甲、鞍馬騾馬、太刀、絹布、皮革、蜜酒、砂糖を献じ、大弟義嗣公に太刀、毛氈、麝香其他を献ず。
9		○	1423	応永 30	島津久豊公（第八代）、人を遣し朝鮮世宗に土物を献ず、硫黄3000石、太刀10柄、金1段、犀角2本、白檀秀10觔、沈香10觔、甘草1觔、蘇木1000觔、扇子20本なり。不腆土宜綿布540匹を同人に以付す。
10		○	1424	応永 31	島津公、朝鮮世宗に人を遣し硫黄3000觔、丹木500斤、漆35斤、太刀5柄を献ず。正布268匹、同人に以付す。《備考》此の年飢疫あり、人多く死し、「往」々挙村無人に至る。
11		○	1426	応永 33	2月、島津公、犬追物を献ず。此後しばしば犬追物行はる。以後略す。
12		○	1471	文明 3	9月、桜島黒神村神火燃ゆ。
13		○	1475	文明 7	8月、桜島野尻村神火燃ゆ。
14		○	1476	文明 8	9月11日、桜島地震、12日発火、石裂け岩崩る。人畜を圧殺し地踊り出て海中に出づ、広さ二里所、島と合して一つとなる。
15		○	1532	天文 1	薩摩士野村良昌、琉球より孟宗竹、楊柳、夾竹桃、唐垂竹を持ち帰れりといふ。
16		○	1540	天文 9	島津日新公、加世田征伐の祈願成就の謝恩の意を以て、伊作野牧を創設し、金峰山に額を奉納す。
17	○	○	1543	天文 12	8月、ポルトガル船、種子島に来航、領主種子島時堯、鉄砲を譲り受け、砲術を習う。
18		○	1543	天文 12	鉄砲伝来の時、南蛮人の賈人アラビヤ馬を種子島に輸入したれば、島津氏更に之をとりて指宿に上陸せしめ、吉野牧に入れたりといふ。
19	○		1549	天文 18	7月、フランシスコ・ザヴィエル、鹿児島に来着、キリスト教を伝える。
20		○	1551	天文 20	大永7年（1527年）兵火に罹りたる国分八幡宮の再建造営を企画す。〔永禄3年（1560）竣工、遷座始る〕此造営中、霊夢により1月18日を例祭とし、此際馬に盛装せしめ且つ玉鈴を着けしめたること、現今の鈴懸馬の濫觴なりといふ。
21		○	1566	永禄 9	9月9日霧島山噴出す。燃焼して人多く焼死す。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
22		○	1568	永禄 11	薩摩郡入来村の長野牧創始さる。
23		○	1571	元亀 2	川辺郡神殿に金銀銅山を発見し、発掘盛んなり。《備考》三月、大村純忠長崎をポルトガル人に開く。六月、毛利元就、島津貴久公卒す。九月、信長叡山を焼く。
24		○	1576	天正 4	6月、近衛前久鹿兒島を発す。島津忠良公、茶入、琉球苴、沈香、蘇木、止字寸、精綿其他を献ず。《備考》二月、信長安土城に移る。
25		○	1577	天正 5	琉球王、天界寺修翁和尚を遣し、書をもたらしめ来聘す。島津公に黄金 3 枚、蘇木 1000 斤、絹子 20 端、蠶綿 50 把、紅泉 6 斤、唐焼酎、老酒其他を献ず。
26		○	1580	天正 8	福山野に馬牧を創始す。
27		○	1584	天正 12	桜島嶽牧復興。《備考》秀吉比叡山を再興す。大村有馬の使羅馬に入る。
28		○	1585	天正 13	島津公、幕府に黄金 100 両、馬 3 疋、鷹 1 連を献上す。上井覚兼、島津氏久公著はすところの馬書の写本を作る。琉球王、使を遣し、香 7 品、唐墨 2 錠、唐紙 200 枚、碧蠶糸 50 把、紅花 100 斤、食盒 1 枚等を島津公に献ず。《備考》秀吉南蛮寺を毀つ。
29		○	1589	天正 17	1月、島津公、関白公に鉄砲雁 20、鴨 50 を献ず。《備考》五月、秀吉使を琉球に遣す。
30		○	1595	文禄 4	3月10日島津義弘公豊臣秀吉の朝鮮征伐に従軍し朝鮮昌原に獵をなし虎 3 匹を殺す。
31		○	1596	慶長 1	初めて煙草の種子を得、薩摩国揖宿郡指宿の里に栽植す。日本煙草栽培の濫觴なり。(薩摩煙草録)
32	○	○	1598	慶長 3	10月朔日、豊臣秀吉出兵の朝鮮の役終り、島津義弘帰還に当り、ウシウマを連れ帰る。鹿兒島で飼育、のち吉野牧に移す。 【長】(※ 1599年のこととして) 島津義弘公朝鮮征伐より帰るに及び韓土の奇獸ウシウマ 10 数頭を携へ帰り鹿兒島城内既に飼養す。同時に朝鮮より蜂飼を従え帰り、後、加治木の旧城大手口の阪下一反余歩の地を与え、蜜蜂飼養場を設けしむ。人呼んで蜂飼市左衛門といへり。又朝鮮名医金徳捕虜となりて薩摩に来る。此時帰化人二十人余姓を連れ帰りしが、此等の中、金海、及朴平意は島津公の好遇に報いんため日置郡伊集院村苗代川及〔始良郡〕帖佐村に居住して其職業なる製陶(長：陶製)の業を始む。薩摩焼の濫觴なりとす)《備考》閏三月、前田利家薨ず。五月、長曾我部元親卒す。六月、島津忠恒高野山供養碑建立。
33		○	1602	慶長 7	島津公、徳川家康公(神祖)に硫黄 1000 斤、砂糖 1 槽を献ず。
34		○	1603	慶長 8	島津家久公、徳川家康公に砂糖、沈香(10斤)、伽羅(3斤)、段子(10巻)を献じ、徳川秀頼公に豹皮 2 枚、伽羅等を献ず。
35		○	1603	慶長 8	冬初めて向島蜜柑を徳川家康公に献ず。此後屢々向島蜜柑を徳川家康公に献ず。以後略す。(向島は桜島のことなり)。《備考》二月、家康征夷大將軍に任ぜらる。三月、小笠原為信初めて長崎奉行となる。四月、秀頼内大臣に任ぜらる。九月、曾呂利新左衛門歿す。
36	○		1605	慶長 10	野間総管、閩よりむんす芋(蕃薯)を沖繩島へ持ち帰る。(※『薩藩の文化』によれば、これに先んじて 1597年に甘藷(蕃薯)が中国より宮古島に入ったという(鹿兒島市 1935: 185))
37		○	1605	慶長 10	島津義弘公病む。前將軍、祐乗坊をしてこれを医せしむ。砂糖 500 斤を献じ謝せしむ。
38		○	1606	慶長 11	服部左衛門宗重、島津義久公の許可を得、煙草を国分梅木の地一反歩に試植す。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
39		○	1608	慶長 13	島津公、神祖に砂糖 2000 斤、蘭 2 本、竜眼菓子を献ず。
40	○	○	1609	慶長 14	3 月、島津家久、琉球攻略を開始、4 月首里を手中に収め、琉球国王尚寧を捕虜として 5 月鹿児島に凱旋。 【長】島津家久公、徳川家康公の命により琉球を征す。打手の大将樺山権左衛門久高、誓願の旨趣あり、帰朝の後、官に申して佐多山崎村に佐多の御崎権現社を移し再建せり。彼は琉球より持参せる蘇鉄を華表の左右に植ゆ。後、年々繁殖して全山数万株となる。
41	○		1609	慶長 14	5 月、琉球従軍の喜入領主肝付兼篤、凱旋に際しノヒルギを持ち帰り、喜入海岸に植えるという（口碑）。
42	○	○	1609	慶長 14	12 月 26 日、島津家久、駿府の徳川家康に謁し琉球の仏桑花を献ず。 【長】島津公、徳川公に虎皮 5 枚、熊皮 10 枚、焼酎 2 壺を献ず。又螺填屏風、仏桑花 1 本、茉莉花 1 本、硫黄 1000 斤、象牙、南蛮鉄砲等を献ず。
43		○	1609	慶長 14	大島の直川智、琉球に航せんとして、たまたま颶風に遭ひ、閩に漂着し、其の地に滞在して甘蔗栽培法及び砂糖製造法を習得す。（奄美大島の糖業）
44	○	○	1610	慶長 15	奄美大島大和村の直川智、閩より甘蔗苗 3 本を持ち帰り育てる。それによってやがて黒糖百斤を得たという。 【長】直川智甘蔗を携え帰り之を大島大和浜大金久村字西浜の地に植え、黒糖凡そ百斤を得たり。是本邦に於ける糖業の初めなり（同上）
45		○	1610	慶長 15	9 月、安南国入貢し薩摩浦に着す。沈香の柱 12 本、（1 本につき 4 人持）、沈香彩木 1 本、糖水十壺、沈香 10 升（是は上の沈香なり）、象牙 2 枚、鸚鵡 1、孔雀 1、リンケイ（鳥名）、紋絹 2 疋を献ず。
46	○		1611	慶長 16	10 月、沖繩駐留の薩摩将士の帰還に際し、琉球王甘藷を土産として贈る。
47		○	1612	慶長 17	幕府全国に煙草を吸うこと、並びに売買耕作を禁ず。
48		○	1612-1613	慶長 17、18	甘藷、呂宋より薩摩唐湊（現今の鹿児島市隣接地西武田村の一字）に入る。（※内藤版は唐湊の位置を「川辺郡坊之津の地」とする）
49		○	1614	慶長 19	島津家久公、琉球産仏桑花及び茉莉花を徳川家康に献ず。
50		○	1615	元和 1	9 月全国に令して煙草を厳禁す（慶延略記）。（※内藤版に無し）
51		○	1616	元和 2	10 月幕府全国に令して煙草の耕作を禁ず（同上）。
52		○	1616	元和 2	11 月島津義弘公鷹を谷山に放つ。
53		○	1617	元和 3	薩摩より陶工高麗人張献功、一官（長：宮）三官を琉球に遣して其の技術を伝へしむ。（琉球陶工の起源）。
54		○	1617	元和 3	4 月 2 日琉球王の使者、薄芭蕉布 20 端、油槽 2 個、焼酎 5 壺、赤苧布 5 端、銀台等を島津義弘公に献ず。
55		○	1617	元和 3	冬、島津義弘公、花毛氈 10 枚、硫黄 3000 斤を将軍に献ず。
56		○	1619	元和 5	5 月天下に令して煙草の培養及び売買を禁ず。
57		○	1619	元和 5	島津家久公、硫黄、磁器、中山焼酎、熨斗砲を将軍に献ず。
58	○		1623	元和 9	儀間真常、明へ行く施設の部下に、福州にて製糖法を習得するよう依頼する。その結果は沖繩製糖の始。
59		○	1623	元和 9	7 月 10 日蛮船、山川に到る。船中錦欄、白糸、白砂糖、黒砂糖を載す。60 余日山川に止る。
60		○	1624	寛永 1	甘藷薩摩より長崎に入る。
61		○	1627	寛永 4	2 月種子島弾正伊時、帖左に來り義弘公の膝突栗毛の事跡の煙滅せんことを恐れて、史官田中五右衛門国明に囑して文を草せしめ碑を立つ。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
62		○	1627	寛永 4	秋小蠅といふ蟲田に入る。
63		○	1631	寛永 8	大御所、永井監物を遣し、島津公に駿河蜜柑を賜ふ。
64		○	1633	寛永 10	10月8日大家、家老を遣し島津公に鹿1頭を賜る。
65		○	1634	寛永 11	蜂飼市左衛門士格に列せられ、小川姓を許され鹿児島に移住す。
66		○	1639	寛永 16	海内大飢饉死者道路に充つ。島津光久公入朝して襲封後、謁を賜ひ馬一匹を賜ふ。国に帰るに馬を賜ふことこれに始る。(※内藤版に無し)
67		○	1640	寛永 17	大家、島津光久公に御鷹の鶴(鷹の捕へたる鶴)を賜ふ。襲封後国に帰れば御鷹の鶴を賜ふこと之に始る。(此後屢々御鷹の鶴、雁鶉、雲雀等を賜はる。以後略す。)(※内藤版に無し)
68		○	1640	寛永 17	3月山内与右衛門、薩摩郡永野村の溪谷にて金鉱を発見す。金場を大府に請ひ横川に立つ、其後国中に試み、芹ヶ野に金出づ。之より衆をして之を掘らしむ。
69		○	1640	寛永 17	此年諸国牛疫流行す。
70		○	1641	寛永 18	薩藩主砂金 1000 両を大府に献じ且つ長野(内:永野、以下同様)金場を献ずることを請ふ。
71		○	1642	寛永 19	1月14日、長野金山御領となる。
72		○	1642	寛永 19	3月7日、向島(桜島のこと)神火燃ゆ。
73		○	1642	寛永 19	島津寛陽公、金場の得る所の砂金 40 貫を献ぜんことを請ふ、県官受けず、之を還賜す、乃ち棒 3000 両を献じ恩を謝す。
74		○	1643	寛永 20	長野金山発掘停止さる。
75		○	1624-1643	寛永年間	琉球より西瓜薩摩に渡来す。(※内藤は 1627 年に繫年)
76	○		1644	正保 1	明が滅び清建つ。清、世祖の順治 1 年。
77	○		1644	正保 1	10月14日、儀間真常親方歿、年 88 (1552-1644)。唐名麻平衡、野間総管が福建から持ち帰った甘藷を植えひろめる。また製糖を始める。(1605、1623 参照)
78		○	1644	正保 1	異国船薩摩桜島に漂着し、其の船を修繕する間に、土人に黄櫨の種子を与え小河の地に植えしめ、実を取りて蠟をとることを教ゆ。(※内藤版は「(薩藩の文化二〇〇頁参照)」と記す。)
79	○	○	1645	正保 2	アカネ科のサンダンカ(長・内:三段花)琉球から薩摩へ渡る。
80		○	1645	正保 2	幕府諸国に命じ山林の濫伐を禁ず。(※内藤版に無し)
81		○	1646	正保 3	頃歳薩洲侯、枳殻の生本を唐山に得て、之を属島長島に栽培し其の成長して結実するを待つて、播種法又は接換法に依つて多数の苗木を作り、之を封内瀬海の暖地に移植せしむ。此木後年成長して多数の果実を産す。因つて海内の諸洲に貨売し一大国産をなす。
82		○	1647	正保 4	大和国吉野郡の民、大隅屋久島の杉苗を求めて、之を郡中に播種す。
83		○	1649	慶安 2	薩洲侯、大隅地図、日向地図、琉球城図成る、各一帳を使を遣し井上筑後守に付して将軍に上る。8月5日薩摩地図、琉球地図、大島地図、八重山地図成各二帳及び日隅薩図用帳 6 冊、路程帳 3 冊、琉球図田帳、路程帳各 1 冊を大府に上る。
84		○	1656	明暦 2	6月26日、将軍、島津綱久公の請を許して、領内各地の金山を鑿たしむ。之より長野、山ヶ野両金山あり。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
85		○	1658	万治 1	垂水家第7代島津玄蕃頭久浩、羊を海瀉村小浜の原野に放畜す。後、天明年中、桜島炎上のため、牧羊困難となり、海浜の海上江の島に移す。
86	○	○	1658	万治 1	9月29日、明の帰化人何欽吉、都之城で歿す。広東海県の人、医を業とす。人参を発見、鬚人参を製して薬用とする。世人薩摩人参という。 【長】9月29日明人何欽吉死す、彼は明末の乱をのがれて、内の浦に來り、歸化し医道を業とす。彼は梶山の山中にて和人参（薩摩人参）を発見せしものなり。
87		○	1658	万治 1	宇宿村の農民採樵して、錫鉱を得たり。之より谷山郡福本村の錫坑起れり。
88		○	1659	万治 2	春、庄内都城より高城、山之口、勝岡の通路に並松を植う。
89		○	1659	万治 2	薩洲侯、均田令数条を下す。
90	○	○	1659	万治 2	薩摩山川郷福元に龍眼樹を植えつける。また、 ^ハ 豆 ^ス も植える。山川薬園の起原。 【長】此頃山川郷福元に龍眼山を作り、龍眼、荔枝、巴豆、枳殻其他薬草木を栽植し御薬園を建設す。御薬園坪数約5、6反歩、現在の山川小学校校庭は御薬園の跡にして、龍眼（内：「二株、インドゴムノキ大木」と追記）の古木を存す。
91		○	1660	万治 3	大老の命を受け申木野、芹ヶ野金山を初めて採掘す。
92		○	1658- 1660	万治年中	島津光久、阿久根母子島に鹿を放つ。
93		○	1662	寛文 2	8月垂水の小喜田三八、四国阿波徳島より、甘蔗の種子を得て垂水村市來に栽培せり。之垂水砂糖の起源なり。
94		○	1666	寛文 6	長島大嶽野牧創始。
95		○	1666	寛文 6	海内諸国淡竹開花多く枯死す。
96		○	1667	寛文 7	3月島津光久公、庄内高城、去酉年、狩倉、猪鹿73丸を獵す。（※内藤版に無し）
97		○	1661- 1667	寛文年中	藤堂和泉守、キリシマツツジ（映山紅）を霧島山より取り寄せ秘蔵し、後多く取り寄せ染井の下屋敷に栽植す。
98		○	1675	延宝 3	8月天下に令して本田畑に煙草培養すべからずの旧令を復す。（※内藤版に無し）
99	○	○	1683	天和 3	第20代藩主島津綱貴、かねて吉野牧に飼育中のウシウマを、種子島領主種子島久時に与え、同島内で飼育させる。 【長】6月島津綱貴公、種子島の風土のウシウマに適すればとて、島主種子島久時に、残存せる5頭を賜ひ、久時は特に住吉村安城に芦野牧を新設し放飼せり。
100		○	1683	天和 3	薩摩朝議して、初めて鹿籠の金山を開き鉱石を掘り、黄金となさしむ。此山周囲1里20余町、芹ヶ野金山の金鉱乏しくなるに及び、同所の衆を鹿籠に移す。
101		○	1681- 1683	天和年中	美人蕉琉球より輸入さる。
102		○	1686	貞享 3	11月下郡元、脇田、谷山迄白貝多く出づ。
103	○	○	1687	貞享 4	新納又左衛門時升、龍眼樹を藩主に献ず。よって、佐多伊座敷に地を相して植えつける。龍眼山と称し、佐多薬園のはじまり。 【長】2月8日新納時升の藩主に献上せる龍眼樹を平田清右衛門取次にて佐多村伊座敷の地に栽植す。
104		○	1688	元禄 1	藩公一般農民に蠶の飼方仰付けらる。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
105		○	1688	元禄 1	川辺郡野崎村、清水村、神殿村に鉄の試掘旺んなり。
106		○	1689	元禄 2	5月15日琉球国より水牛2頭を島津公に献ず。山川より鹿児島に届き、御厩の池中に放つ。
107		○	1690	元禄 3	6月18日霧島山噴出す。降灰数日。
108		○	1693	元禄 6	6月穎娃牧、唐松野牧創始。
109		○	1694	元禄 7	島津貫陽公病あり。医を幕府に求む。幕府橘隆庵を薩摩に遣し医せしむ。駿あり（※内藤版には「駿あり」の句なし）。9月5日隆庵鹿児島を発す。
110		○	1698	元禄 11	大府より金銀銅山を試むべきの命あり。是より再び芹ヶ野、河辺神殿山を掘り金許多を得、既にして止む。
111	○	○	1698	元禄 11	3月、琉球国王尚貞、甘藷一籠を種子島領主久基に贈る。よって、久基それを同島石寺野に植えさせる。 【長】琉球より甘藷の種苗を薩州種子島の領主島津久基に贈る。久基、家老西村権右衛門時乗をして、之を同島石寺野の地に栽へしむ。之我国に於ける甘藷栽培の始めなり。
112		○	1698	元禄 11	彌寝清雄、吉利及び邑呂穎娃に命じて蘆を植へしめ頗る利あり、又肝付氏に勧めて其邑に植へしむ。肝付氏之を利とし桜島に種す。
113		○	1702	元禄 15	薩侯使を遣し、薩隅日琉球地図12帳を評定所に上る。
114		○	1687-1703	元禄年間	清国福州の船、阿久根に漂着す。船長謝文旦、唐通事、原田喜右衛門へ文旦の苗木を献ず（先人の遺沢）。（※内藤版に「(先人の遺沢)」の記載なし）
115		○	1704	宝永 1	1月島津綱貴公、大隅国巡見の帰途、桜島湯の浦に於て鹿3頭を猟す。
116	○	○	1705	宝永 2	薩摩国穎娃郡大山村岡兒ヶ水の漁師利右衛門琉球より甘藷を持ち帰り、植えひろめる。 【長】揖宿郡山川郷兒ヶ水の漁夫前田利右衛門、琉球に航し甘藷数顆を携へ帰り、之を郷里に試植し其繁殖を待ちて之を闔村にわかす
117		○	1713	正徳 3	下見吉十郎（甘藷地蔵）薩摩伊集院より伊予大三島に甘藷を移植す。
118		○	1713	正徳 3	薩摩より初めて大阪市場に琉球産黒砂糖を輸出す。其状宛も炭団の如く之を丸玉と称す。
119		○	1715	正徳 5	原田三郎右衛門（甘藷翁）薩摩より甘藷を対馬に移植す。
120		○		享保以前	正確なる記録なきも薩摩鯉節の起源は屋久島の古老に依れば享保以前ならんといふ（さつまぶし）。
121		○	1716	享保 1	2月18日霧島山大燃初まる。12月16日霧島復火を発す。降灰4日、高原、高城、都城、小林、須木、野尻、高岡等田疇皆埋まる。此時牛馬多く死す。
122		○	1717	享保 2	1月3日、霧島火を発す。7月又噴火し連日止まず。
123	○		1718	享保 3	清、康熙57年、琉球への冊封副使徐葆光、帰清後『中山傳信録』を著わす。
124	○	○	1719	享保 4	7月5日、岡兒ヶ水の利右衛門、海上にて遭難水死。墓は岡兒ヶ水にあり、墓表に「一翁祖元居士」。 【長】7月5日（内：7日）、前田利右衛門今年再び遠く出漁し、山川附近に於て難船、海門岳の見ゆる所にて溺死す。郷人其生前の徳に感じ、山川町岡兒ヶ水に甘藷翁碑を立て徳光神社に奉祀す。
125		○	1721	享保 6	7月5日、伊豆の代官川原清兵衛、龍眼樹2株を伊豆の大島に植ゆ。10月更に龍眼樹2株、荔枝3株を大島に植へ薩摩龍眼肉種子1袋、長崎龍眼肉種子1袋を播種す。種子発芽せず。生樹枯死す。

	上野	長井	西暦	和暦	事項
126		○	1725	享保 10	太田五郎右衛門、江戸に使用して白鷗を得て帰り藩公に献ず。公之を愛姫お元に賜ふ。
127		○	1725	享保 10	5月28日より6月21日の間、大磯附近の狐狩をなす。狐6、狸、兎各々2、猪、鹿各々1、山鱈といふもの1を得たり
128		○	1727	享保 12	將軍徳川吉宗、甘蔗苗を琉球より取り寄せ、薩人落合孫右衛門を召して浜及び吹上の園中に成植せしむ。
129		○	1728	享保 13	4月笹実熟す、此年大飢饉にして之にて命をつなく所あり。
130		○	1729	享保 14	9月琉球人、唐より火無くして塩を採る方法を稽古したる事を藩府に申し出づ。鹿児島塩屋にて稽古を仰付けらる。
131		○	1732	享保 17	天下大飢饉あれども、三州は甘藷あるを以て死する者少し。藩公家鴨の卵を鶏に抱かし孵化せしめ其の首尾を届けしむ。
132		○	1733	享保 18	井戸正明(甘藷代官)薩摩より甘藷を石見国大森に移植す。
133	○		1734	享保 19	3月、「諸国へ産物お尋ね」触書。
134		○	1734	享保 19	幕府、青木文蔵に命じ甘藷の種子を薩摩より徴し、小石川養生所(今の植物園)170坪の地に諸種181顆を試植し、5651顆を収穫せり。
135	○		1735	享保 20	諸国へ産物お尋ねを実行に移す。総裁丹羽正伯(貞機)。
136		○	1716-1735	享保年間	富山売薬(反魂丹)を薩摩内にて行商する事を許可す。
137	○	○	1736	元文 1	5月、第21代藩主島津吉貴の申入れにより、琉球より江南竹2株を鹿児島に渡す。これを磯庭園内に植える。のちにこの竹を国字で孟宗竹と名付ける。 【長】3月、島津吉貴公、江南竹20株を琉球に求む。5月琉球より2株を献じて曰く、「頃歳之を漢土に得て未だ藩衍せず、因つて数に充つるを得ず」と。之を磯別邸に植ゆ。之を九州以北に普及せる発祥地となす。
138		○	1736	元文 1	大島、徳之島地方に天然痘流行し死するもの多く、予防法なし、悪疫払いの踊をなす。
139		○	1736	元文 1	4月、將軍吉宗駅路の鈴の形を知らんと欲し、之を林家及び神祇官白川従二位雅光等に尋ね問へども詳ならず、依つて広く海内に尋問せしに、鹿児島神宮の大宮司同社前の宝の箱の中に鈴明神と尊崇せる神体即ち古代の駅鈴なるを発見し、其の形状を模写して之を將軍に献ぜり。
140	○	○	1737	元文 2	9月8日、薩摩藩、『薩摩国産物絵図帳』ほかを「産物お尋ね」総裁丹羽正伯に提出。それらは薩摩大隅日向諸縣郡産物惣本帳3冊、同上絵図帳春夏之部5冊(うち3冊薩摩)で、秋冬之部はのちに提出。 【長】加賀国、稻生若水、庶物類纂を編輯し、未だ成らずして死す。県官其の遺稿を得て丹羽正伯に命じ之を補成せしむ。諸国に移文して其の土に産する物をうつして之を正伯に致さしむ。7月8日、薩摩公、薩摩、大隅県郡産物図説を丹羽正伯に致す。且ついふ、今日図説は春夏の部に止まり、秋冬の部は次いで上進すべしと。"
141		○	1738	元文 3	5月5日、土産図説、秋冬の部成り薩摩より至る、薩侯、留守居を遣はして之を丹羽正伯に致す。
142		○	1740	元文 5	オランダ人水漉石を幕府に献ず。依つて海内諸国に命じて日本にも産するやを調査せしめしに、伊豆みづみかげ、薩州岩石、つつ石、遠州、浅隅石、之と同物なるを発見せり。
143		○		元文以後	八丈島に薩摩より甘藷を移植す。
144		○	1742	寛保 2	幕府、諸国に命じて森林を伐採し開墾することを禁ず。(※内藤版に無し)

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
145		○	1743	寛保 3	11 月、彗星夜に入る頃より 5 つ時分まで見ゆ。(※内藤版に無し)
146		○	1744	延享 1	8 月、大地震、10 日大風、毛降る。
147		○	1744	延享 1	冬月薩州硫黄島の洋中に於て亀竜 1 頭を得て藩府に致す。
148		○	1745	延享 2	9 月 26 日薩侯、将軍に塩鶴、鯛、昆布樽を献ず。
149	○		1745	延享 2	11 月 6 日、島津重豪、鹿児島で生まれる。初名久方、のち忠洪。
150		○	1746	延享 3	南泉院、南林寺諸所の松に虫つく。故に 24 人の百姓、虫踊をなす。
151		○	1753	宝暦 3	薩侯、木曾川治水の命を受く。家老及び諸有司を遣して役せしむ。
152	○		1755	宝暦 5	7 月 27 日、重豪、父島津重年の遺領を継ぎ、25 代薩摩藩主となる。
153		○	1756	宝暦 6	4 月 5 日幕府、国目付京極高主(兵部)青山親七右衛門薩摩に到る。記録奉行吉田清純等編する所の地誌要略 2 冊を呈す。
154	○		1758	宝暦 8	曾槃、江戸で生まれる。
155	○		1762	宝暦 12	8 月 5 日、白尾国柱、鹿児島で生まれる。
156		○	1751- 1763	宝暦年中	クサアダン(※蘆薈、アロエ)琉球より輸入さる。
157		○	1751- 1771	宝暦、明 和の頃	出水郡阿久根大同寺の住職芳円、城州宇治興正寺に寓居し宇治茶の製法を受けて帰郷す。
158		○	1751- 1771	宝暦、明 和の頃	薩藩家老菱刈実詮建議して、佐多郷薬園創始さる。
159	○		1766	明和 3	清、乾隆 31 年、徐葆光著『中山傳信録』刊。この書が載せる琉球の産物(動植物)は、薩摩博物学の発達に大きい影響を及ぼした。
160		○	1766	明和 3	大沢権右衛門 <small>オイモヂイサン</small> (甘藷翁)薩摩より甘藷 3 個を静岡県榛原郡御前崎村に移植す。
161	○		1767	明和 4	2 月 2 日、木村探元、鹿児島で歿する、年 89、画家。金左衛門、藩主吉貴から探元、京都の近衛家久から大貳の名を貰う。花鳥画をよくし、琉球植物の絵を残す。
162	○		1767	明和 4	南山老人(重豪)著『南山俗語考』成る。中国南部の俗語を集め、音韻を正し邦訳をつけ、自らの備忘とする(1812 参照)
163		○	1767	明和 4	徳之島に疱瘡流行す。
164	○		1768	明和 5	10 月、薩藩の命で、琉球に産物取調奉行を置き、各島の「諸蟲草木葛竹」を採集させる。採集諸品は明和 6、7 年に薩藩に納めさせる。
165	○		1769	明和 6	田村藍水著『中山傳信録物産考』3 卷成る。
166	○	○	1770	明和 7	4 月、島津重豪、琉球植物の標本 10 櫃を田村藍水に下賜する。
167	○	○	1770	明和 7	8 月、田村藍水著『琉球産物志』15 卷同附録成る。邦人によって作られた琉球植物誌のはじめ。 【長】(※ 1771 年のこととして)江戸の医師、本草学者田村元雄の篤学に感じ、島津重豪公、琉球諸島の産物 1000 余種を贈る。元雄大ひに喜び、琉球産物誌 15 卷附録 3 卷を著し其の図説を作る。
168	○		1771	明和 8	島津重豪、27 歳、幕府の許可を受け、江戸から帰薩の途中、長崎へ赴き海外から渡来の文物を実見する。
169		○	1764- 1771	明和年中	琉球産ガジュツ(※莪朮)薩摩より上る。京師浪花の人々競ひ栽植するも皆越冬せずして枯る。此頃キヤウワウ(※薑黄)琉球より入る。
170		○	1772	安永 1	2 年 5 月迄徳之島全島に一種の疫病流行す。全島老若男女一人として煩はざらなく死者千余人なり。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
171	○		1773	安永 2	薩藩の阿野道恕、東都田村藍水に入門、本草学を修む。学成らずして江戸で客死。
172		○	1773	安永 2	洋舶、豪猪を薩摩に伝へたるもの此年春大阪に來り觀物とす。
173		○	1773	安永 2	徳之島稲作に虫害あり。種子初に困難を來し、飢饉に陥り、米 800 石を借りて危地をまぬかる。
174		○	1773	安永 2	8 月 29 日、薩覺造土館及び演武館を創立す。
175		○	1774	安永 3	3 月 14 日、島津重豪公、坂本村造土館と斜に相對して、医学院を建て、翌月学規を定め、医道の研究を命ず。之と同時に神農廟を医学院の左側に立て、唐土上古の君、炎帝神氏を奉祀す。
176	○		1776	安永 5	3 月 25 日、田村藍水歿する。年 59、浅草真龍寺に葬る。名元雄。
177		○	1776- 1777	安永 5、 6	薩州知覽の人、仲覺兵衛骨粉を農事に用ふる事を発見す。
178		○	1777	安永 6	大島地方に初めて煙草流行し笠利間切に多く之を植ゆ。時の代官之を藩庁に上申し、煙草作を禁ぜり。
179		○	1778	安永 7	海内諸国、淡竹林に病付き多く枯死す。
180		○	1778	安永 7	琉球人新垣筑兵衛、島津重豪公より帰化を命ぜられ、彼が支那福州に於て伝授し來れる唐紙製造の業に従事す。
181		○	1779	安永 8	10 月朔日、桜島南方の山より大いに火を發す。死者 153 人、田畠の損失 2 万余石に及ぶ。
182		○	1779	安永 8	10 月 26 日島津重豪公造土館の東南、中福良に明治館を立つ。推歩測候及び露台等を備付く。
183	○	○	1779	安永 8	鹿児島府城の東北、吉野丘陵地上に吉野薬園を開く。 【長】吉野村大字帯迫の台地を拓いて薬園を開き（今の吉野小学校肯定）、諸種の薬草を栽植す。
184	○	○	1779	安永 8	江戸高輪の島津邸内に、磯の仙巖園の江南竹（孟宗竹）を分植する（1736 参照）。 【長】江戸品川の薩藩邸に琉球産孟宗竹の箐を初めて栽植す、世人之を珍賞す。
185	○	○	1780	安永 9	薩藩薬園署開設、阿野道恕（1773 参照）の子元齋、薬園見習医師。（※『鹿児島市史』は 1781 頃とする。長井版は 1781 に繫年。また、『鹿児島市史』には、1783 年（天明 3）に薬園掛設置とある（鹿児島市史編さん委員会編 1969: 461））
186	○	○	1781	天明 1	6 月、江戸青山の本草家佐藤成裕（膝成裕）、号中陵、島津重豪の委嘱によって薩摩に入り、藩内採薬。（※長井版は「今、薩州採薬録なる写本あり、編者、考ふるに彼中陵の著はせるものなるか、今之を詳にするあたはず、以後考を待つ」とする。内藤版には疑義のコメントなし）
187	○		1781	天明 1	薩摩薬園署、琉球の学士吳繼志、字子善をして、琉球各島の植物を集めさせる。それらを標本や図画となし、あるいは鉢植生植物のまま、清国の学者に送って鑑定を求めるとを続け、1785（天命 5 乙巳）に至る。吳繼志は仮託の人名で、その人が居たのではない。
188	○		1782	天明 2	阿野元齋、東都田村西湖、名元長（藍水の長子）に入門、本草学を修め、蓼製法を習う。
189	○		1783	天明 3	1 月、京都の医橋南谿、西遊の途、鹿児島に來り、城下にジャコウネズミの夥しいのを目撃する。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
190	○	○	1783	天明 3	佐藤成裕、薩摩を辞して東都に帰る。のち、『薩州採薬録』、『薩州産物録』の著がある。 【長】本草学者佐藤中陵、母の疾あるを以て薩州を辞し帰る。薩侯大奥にてお鷹二据を拝領。
191	○	○	1784	天明 4	報歳蘭、琉球から薩摩に渡る。
192	○		1785	天明 5	1月、阿野元斎帰鹿、人参製造法に熟達、のち御広敷医師に昇進。
193	○	○	1785	天明 5	薬園署編述の植物誌内篇 4 巻外篇 4 巻成り、『質問本草』と名付ける。彩色本。(1834 参照) 【長】(※ 1786 年のこととして) 薩侯、村田経船に命じて琉球の学士、呉継子なる者をして、琉球山中及び其属島の奇花野草開花に至るまで採取させ、葉を腊し花を描せ、之を歳貢者に託して、天明元年辛丑より天明 5 年乙巳の年まで、各省の鴻医碩儒 45 人に就いて、その名称主療を質問せしむ。呉継子之を集録して内外篇八巻となし、天明六年薬園局に進呈す。質問本草之なり。
194	○	○	1785	天明 5	ワンピ(黄枇)琉球から薩摩に渡る。
195		○	1786	天明 6	11 月 18 日中山王より薩侯に龍延香 20 袋、縮緬 20 巻、芭蕉布 20 反、八重山海鼠 2 箱、泡盛 3 壺を献ず。
196	○		1787	天明 7	1 月 29 日、島津重豪隠居する、43 歳。
197		○	1787	天明 7	薩侯、渋江源蔵、新垣筑兵衛等をして、琉球の砂石草木鳥獸を調査せしむ。
198	○		1788	天明 8	曾槃、来日の清国蘇州府の薬材肆呂宏昭と、薬物についての問答を交わし、『呂宏昭薬品答』1 巻を作る。
199		○	1788	天明 8	渋江源蔵、新垣筑兵衛等琉球より帰国す。
200		○	1781-1788	天明年中	富山売薬一時差留あり。
201		○	1781-1788	天明年中	天明中薩摩に持ち来られたる鳥類は次の如し。駝鳥 3 羽、及び本国鳩、スタンエントウ(紅毛国→長崎→薩摩)ヤアルホウゴロ 1 羽、カアフスカナリヤ雄 2 羽(紅毛国→薩摩)、珍美鳥(琉球→薩摩)。
202		○	1789	寛政 1	合薬吟味役、上野新左衛門、御領内居付人といふ分にて、合薬商売を 16 人まで富山売薬業者に差許す指令出づ。之より売薬は我薩藩に入り、爾来年と共に田舎の隅々まで入れつけ越中といふ語は殆んど売薬の代名詞となるに至れり。
203	○	○	1790	寛政 2	琉球から ^{ハズ} 巴豆の生本 1 株薩摩へ渡る。佐多薬園に移植する。 【長】琉球人、巴豆の活木 1 株を福建連紅県に得て之を薩摩に致す。
204		○	1790	寛政 2	徳之島天然痘大流行し 431 人死す。
205		○	1790	寛政 2	桜島火を發し巨石を飛ばし積巖を崩し、島民死するもの多し。
206		○	1791	寛政 3	牟礼野牧廃止さる。
207		○	1791	寛政 3	薩摩より日向那珂に甘蔗移植さる。
208	○	○	1792	寛政 4	曾槃、重豪の侍医兼記室(秘書)に採用され、薩藩臣となる。 【長】本草学者、医師曾占春、堀本蘇山の推奨に依り薩摩に來り、島津重豪公の記室となる。禄 15 口、金 30 両、薬 4 石を賜ふ。時に彼 32 才なり。参圃吉野御薬園中にあり。地に応ぜず。今年官園の参子を乞ひ、曾占春をして地を相せしめ、隅日諸山の中 20 箇所に植ゆ。歳毎に増へ 3 年を経て官製にならひ蒸製す。国用余り有り。種薬の園を閉づ。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
209	○	○	1792	寛政 4	3月、重豪、新営の江戸高輪蓬山隠館に遷る。 【長】島津重豪公、江戸高輪に別野を営み、蓬山館と名づけ、西洋製の弄玉亭を擬造し大磐石の度景を安置し、葡萄架を設け花園を作り、之れに独楽園と名づけ、3月11日ここに移転す。
210	○	○	1792	寛政 4	12月、薩藩薬園奉行設けられ、御庭奉行大田筑左衛門用嵩、表御小姓村田藤之助常陶その職に補せられる。 【長】12月初めて薩藩に御薬園奉行設けらる、御薬園奉行5人あり。
211		○	1793	寛政 5	4月19日、薩摩の国より琉球のウサギ馬2疋を関東にひかしむ。
212		○	1793	寛政 5	7月島津齊宣公、旧福昌寺内に君馬堂を設置せしめ、歴代各公の愛馬を歛む、山本正誼碑文を撰す。
213	○	○	1793	寛政 5	『成形實録』改め『成形図説』の編集に着手。 【長】9月3日江戸芝邸に於て、曾占春、白尾国柱等と「成形図説」撰修の命を受く。(※上野版は白尾の参加は1799年のこととする)
214	○		1794	寛政 6	1月、曾槃江戸を発ち、3月薩摩に入り、藩内を踏査す。
215		○	1794	寛政 6	7月曾占春薩摩より東都に帰る。秋8月曾占春農経講義上下2巻を著す。
216		○	1795	寛政 7	曾占春頃歳大隅に結実せし龍眼3顆を吉田篁墩に贈る。
217		○	1795	寛政 7	薩藩臣白尾国柱著薩藩名勝考成る。
218		○	1796	寛政 8	5月曾占春、固定王の「救荒本草和訓灯」1巻を作る。
219		○	1797	寛政 9	曾占春「無人島談話」3巻を著し、八丈島の南方鳥島に漂着せる、薩摩舟人の談話を蒐録す。
220		○	1798	寛政 10	曾占春「本草綱目纂疏」20巻を撰述す。
221		○	1798	寛政 10	島津齊宣公の母於智馬君は藩府にて蓮糸布を絳織せんことを計り、城池の蓮の繊維と蠶糸にて布を作り、1丈5尺幅9寸のもの出来たり。
222	○		1799	寛政 11	9月3日、藩臣白尾国柱、江戸へ召致され、『成形図説』修撰の命を受け、その業を始める。
223		○	1799	寛政 11	曾占春、渋江氏が蝦夷より採集し来れる所の草木腊葉を分類整理し、「蝦夷草木志料」1巻を作る。
224	○		1800	寛政 12	佐藤成裕、水戸藩士となる。
225		○	1800	寛政 12	曾占春、立春前1日「本草綱目纂疏」20巻修正の業成る。9月春の七草1巻を上木す。
226	○		1800	寛政 12	11月14日、島津重豪総髪となり、栄翁と称す。4年後文化1年甲子5月2日剃髪。
227	○	○	1801	享和 1	重豪、曾槃に命じて荏原郡大崎村の別荘に種薬園を造らせ、数百の薬草木を植えつける。 【長】島津重豪公、曾占春に命じて、荏原郡大崎村の別荘に種薬園を作らしめ、秋9月薬草木を移植す。数百品全く集りて、山上の松林中に炎帝廟を創建し曾占春に命じて碑文を書かしむ。
228		○	1801	享和 1	琉球人福州より狼毒の生本を得て之を薩摩に将来す。
229	○		1802	享和 2	1月25日、兼葭堂木村孔恭歿、年67。大坂の富商坪井屋吉右衛門である。島津重豪から薩摩の虫類標本を下賜され、『薩摩州蟲品』（薩州蟲品）1冊を作る。略画と土名とよりなる。

	上野	長井	西暦	和暦	事項
230	○	○	1802	享和 2	10 月、重豪の鳥方役比野勘六の『鳥名集』成る。 【長】11 月薩摩の鳥方、比野勘六「鳥賞案子」成る。(此他彼の著には飼鳥必要 3 冊、鳥博士正統編、養禽物語等あり)。(※内藤版には「(此他彼の著には飼鳥必要 3 冊、鳥博士正統編、養禽物語等あり)」の記載無し)
231		○	1802	享和 2	徳之島の稲田に蝗虫大発生をなす、276 石余捕殺す。
232		○	1802	享和 2	琉球よりリウキウソケイを輸入す。
233		○	1803	享和 3	曾占春、「渚乃丹敷」2 巻を作り、介類を記述す。亦「人参培養法及び製造法」を記述し、又「烹茶樵書」を草し「本草綱目纂疏」3 巻を上木す。
234		○	1803	享和 3	8 月 10 日曾占春、島津重豪公の命により、村童より新鮮なる靈芝を求めて公に呈覧す。
235	○	○	1804	文化 1	11 月 1 日、『成形図説』巻 1-30 成、鹿児島藩蔵版。巻一の巻頭に提要を載せる。 【長】島津重豪公、侍医曾占春、国学者白尾国柱、蘭学者堀愛生に命じて「成形図説」100 巻を撰述せしむ。此年 30 巻を上木す。1-14 巻、農事部、15-20 巻、五穀部、21-30 巻、蔬菜部なり。
236	○		1805	文化 2	5 月、『成形図説』1-20 巻を藩侯に呈出する。
237	○	○	1806	文化 3	3 月 4 日、高輪車町より出火し、芝の薩藩邸類焼、『成形図説』既成の版木 600 枚土蔵に封じて助かる。よって『図説』の編集を一時中止し、白尾国柱らは帰国する。 【長】3 月 4 日、江戸高輪泉岳寺門前より出火、市中大抵焼払はる。高輪薩州藩邸亦全焼す。此時薩摩蔵版「成形図説」の版木原稿共に烏有に帰す。依つて編輯局を廃し、同局員白尾国柱等を帰国せしめ、更に曾占春一人に命じて菌部以下を編輯せしむ。
238		○	1806	文化 3	曾占春、「海内方物紀略」1 巻を著し海内諸国著名の物産を列挙す。
239	○		1807	文化 4	『成形図説』編集再開。白尾国柱は国元から東都に来て加わる。
240	○		1808	文化 5	薩摩藩、奄美大島、徳之島、喜界島 3 島に、毎年一定数のアカヒゲ、尺八鳩を上納すべきことを命ずる。
241	○		1809	文化 6	9 月 28 日、島津齊彬、江戸で生まれる。
242		○	1809	文化 6	曾占春「占春斎魚品」3 巻を著し、有鱗魚 81 種、無鱗魚 52 種、異魚 26 種を記載し和漢名を考証す。
243		○	1812	文化 9	島津重豪公、荏原郡大崎村、大井、白金三村の別荘に茶園を作らしめ、宇治山より好種を得て栽培し、三歳を経て清明穀雨の間に其頂芽を摘み、蒸焙して毎歳内宮へ奉進す、初めは曾占春其他之れに当る。
244		○	1812	文化 9	3 月 28 日、幕府測量方伊能解勘由等大隅国屋久島に上陸す。4 月 26 日種子島に到り 5 月 24 日帰朝す。
245		○	1812	文化 9	川辺郡竹島東方海上より同島に群鼠渡り飢饉に瀕す、7、8 年も留まり漸次減少す。
246	○		1812	文化 9	『南山俗語考』刊。(1767 参照)
247		○	1812	文化 9	曾占春、「水草識略」を作り水草 130 余種を記載す。
248	○		1813	文化 10	11 月 11 日、田原直助、鹿児島に生まれる。名明章、明治後には陶猗と称する。
249		○	1815	文化 12	国分煙草を江戸に販売することを公許せらる。
250		○	1815	文化 12	島津重豪公、橋口兼古に命じて薩藩の勝景百図及び図考を撰せしめ、2 月之れを幕府に上る。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
251		○	1815	文化 12	徳之島、天然痘大流行し、9672 人中 1891 人死亡す。
252		○	1815	文化 12	10 月曾占春武州荏原山荘にありて「橘黄閑記」30 巻の編輯に着手す。
253	○		1816	文化 13	ムラサキオモト、琉球から薩摩に渡る。(※長井版は 1830 のこととする)
254	○		1817	文化 14	4 月 13 日、木脇啓四郎、字祐業、薩摩土木脇祐長の長男として沖永良部島で生まれる。
255		○	1817	文化 14	薩州医学院の薬園生、医師渋谷江東徳大島山中にて、一種の香木を得て、その枝柯及び葉腊を携へかへり、之を東部に伝授し、曾占春をして審査せしむ、沈香なり。黒島に於て蕩竹結果し、一本より 5 合計りあり、其後枯死す。
256		○	1817	文化 14	同島海上より数十万の群鼠渡り来り、島中の穀物を喰ひつくし飢饉に及び、椎実、竹実艾、葉等を以て助命せり。此年幸に魚多く、之にて食を助けたり、群鼠は此年冬より次第に減少せり。
257		○	1817	文化 14	曾占春「薬荘討源」上下両巻を作る。
258		○	1801- 1817	文化年中	藩公の命に依り津崎仁蔵、肝付郡佐多村伊座敷部落の鞍掛に荔枝を植ゆ、此の地は現在村山盛章氏の所有なり。(後天保年間荔枝 2 本を加植す)。
259		○	1818	文政 1	島津重豪公、国人に毛織の業を学ばしめんと欲し、坂元澄明等に緬羊の畜育及び毛織のことを官医渋谷氏につき学ばしむ、坂元翌年帰国し羊毛紡織の業を開く。未だ緬羊の蕃殖多からざるを以て専ら畜養を主とせり。
260		○	1819	文政 2	甘蔗薩摩より天草に入る。
261	○		1821	文政 4	2 月 15 日、白尾国柱、鹿児島で歿する、年 60。
262		○	1821	文政 4	坊之津にて是迄製造せる鯉節は大抵半製(荒節)にて、鹿龍商人に売却せしが、坊村の製造家始めて大阪兵庫に輸出して新に販路開けたり。
263		○	1821	文政 4	曾占春「国史昆虫草木攷」12 巻を編述す。
264		○	1823	文政 6	琉球球より木柯咀呢の生木を輸入す。
265	○	○	1823	文政 6	8 月、曾槃の著『西洋草木韻箋』2 巻成る。また、同じ 8 月、同人の『西洋文物韻箋』2 巻成る。ともに、『成形図説』の編集に資するための用意だという。 【長】8 月 16 日曾占春「成形図説」の志料として「西洋草木韻箋」上下 2 巻、「西洋名物韻箋」2 巻を藩公に奉る。
266		○	1824	文政 7	英国捕鯨船一艘、薩摩封内実島に来り上陸して牛馬の掠奪をなす。島吏吉村九助その一人を射殺す。
267		○	1825	文政 8	阿久根の人宇治に赴き製茶の法を習得し帰る。世に云ふ阿久根茶之なり。
268	○	○	1826	文政 9	3 月 4 日、江戸参府のフォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold) を、島津重豪が奥平昌高、島津斉彬とともに、大森に迎えて会談する。 【長】3 月 4 日、島津重豪公、奥平昌高 (公の次男)、斉彬公と共に公使に従ひて江戸に来れる「シーボルト」を大森に迎へ、鳥獣の剥製法虫類の貯蔵法を問ひ、後ち又難産治療書の編輯を求め、診察を請ふ等、彼等につき種々の事項を学ぶ。
269	○				4 月 12 日、重豪、長崎へ帰るフォン・シーボルトを品川に送る。
270		○	1826	文政 9	官医堀本好益、1 株の楓樹を薩侯に寄贈す。之を蓬山園中に植ゆるに地に旺んにして盛茂せり。
271	○		1827	文政 10	閏 6 月 26 日、今泉耕作、甲斐国都留郡白野村に生まれる。のち白野夏雲と姓名を改める。『麿海魚譜』編著 (1883 参照)

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
272	○	○	1827	文政 10	9月、島津重豪、高輪の蓬山別墅中に宝庫を増築し、年来の蒐集品を収蔵陳列する。聚珍宝庫と称し、小規模の博物館。 【長】10月島津重豪公、夙に内外珍奇の物品を収拾して数千百種に至るを以て、聚珍宝庫なる庫を建てて之に収め、曾槃に命じて碑文を書かしむ。又重豪公、嘗つて和漢殊域の衆鳥を賞づ。時折斃死するものあれば、此年より塚を立てて此処に埋葬す。之を■（マダレにつくりは上に犬、下に土）禽塚と云ふ。
273	○	○	1827	文政 10	連紅県産巴豆渡来し、佐多に植える。 【長】9月佐多に移植せし福建連紅県産巴豆結実す。阿部櫟齋、其实を曾占春に得て園中に下種し新苗を育し翌年9月之を官に上る。
274	○		1828	文政 11	7月、曾槃、自著『質問草木略』、『中山草木』の両書を本間清遊に貸す。このころ出来ていたことの一証左。
275		○	1828	文政 11	曾占春「呂広照薬品問答」及び「質問本草略」を本間清遊に貸す。
276	○	○	1829	文政 12	3月21日、江戸神田佐久間町より出火、燃えひろがった猛火に明石橋の曾槃の家類焼し、歴年の自著、『成形図説』原稿など烏有に帰す。槃この年73歳。 【長】3月、東都柳原より火起り、曾占春が明石橋の家に類焼し、蔵書及び歴年の著述を悉く焼却す。
277		○	1829	文政 12	富山売薬薩摩組合の売薬差止めの令下る。百方運動して禁を解かる。
278		○	1829	文政 12	徳之島、大島、喜界島の出産糖は惣買上とし、若し他に抜売するものあらば死刑に処するの厳法下る。
279		○	1830	天保 1	佐藤信淵、「薩摩経緯記」を著し薩摩の風土物産に関する意見を記し薩摩の国老猪飼央に贈る。
280	○	○	1830	天保 1	重豪の『鳥名便覧』1巻刊行。 【長】島津重豪公、嘗つて斯方及び殊方の衆鳥を集めて架中に充ちたり。鶴、鶴、鳧、雁の俗は池沼及び藪(?)籠に群をなす。頃間暗記の名称を侍臣に書を作らせ、「鳥名便覧」と名づけ上木せしむ。羽族415品を五十音に彙分し和名に附する漢名と蕃名とを以てす。
281		○	1830	天保 1	曾占春、阿部櫟齋が翻刻せし「菊両譜」に序文を草す。
282		○	1830	天保 1	曾占春、薩摩より東都に帰る。其鹿兒島を発せんとするや、薬園奉行、向井滄浪以下これを江上樓に餞せり。
283		○	1830	天保 1	琉球よりムラサキオモト輸入す。(※上野版は1816のこととする)
284		○	1831	天保 2	1月蓬山園中に飼養せる丹鶴卵を孵へたり。
285		○	1831	天保 2	6月曾占春「成形図説」菌部以下13冊を続輯し藩主に呈す。
286		○	1832	天保 3	鹿籠と坊之津との魚場の葛藤を生じ、訴訟三年に及ぶ。
287	○	○	1832	天保 3	曾槃、『仰望節録』、『仰望節録附録』の2書を作り、重豪の事跡を書きとどめる。書中、博物学にわたることが多い。この年、重豪88歳、槃75歳。(※長井版は『『仰望節録』刊行さる』と記す)
288	○		1833	天保 4	1月15日、重豪、江戸高輪邸で病死、年89。
289	○	○	1834	天保 5	3月20日、曾槃、江戸で歿す、年77。墓は品川区上大崎1丁日常光寺にある。 【長】2月11日曾占春歿す。年76、江戸深川富吉町正源寺に葬る。占春院弘誉昌適居士と諡せり。(昭和六年市制改革により墓碑は右の寺より芝区白金常光寺に移転す)

	上野	長井	西暦	和暦	事項
290	○	○	1837	天保 8	『質問本草』薩摩府学版、内外篇各 4 巻付録 1 巻刊。挿図 160。天明 5 年乙巳に成稿し、例言九則が草せられて以来、50 年が経過した。この版は呉継志子善の著の形になっている。 【長】(1837 年の 9 月以降のこととして) 薩藩主祖考の遺志を継ぎ、曾愿に命じ中山呉子善の著せる「質問本草」を校訂し上木せしむ。
291	○	○	1837	天保 8	第 27 代薩摩主島津斉興、磯別邸仙巖園の江南竹林の前に、記念碑を建てる。題して「仙巖別館江南竹記」。撰文は藩の儒者五代秀堯である。 【長】9 月島津斉興公、儒者五代秀堯に命じて、江南竹の由来を不朽に伝へしめんが為、「仙巖別館江南竹記」の石碑を孟宗竹林中に建てしむ。
292		○	1839	天保 10	硫黄島の硫黄採鉱の法を改め、採鉱量増加す。
293		○	1841	天保 12	長崎の人、上野俊之丞を招聘し製菓の法を開く。俊之丞時に「ダケリヤタイプ」といふ写真機を携え来り撮影をなす。是れ我国に於ける写真術の初めなり。
294		○	1843	天保 14	10 月 10 日英国艦八重山に來り上陸測量をなす。
295		○	1843	天保 14	12 月五代秀堯、橋口兼柄等の編輯「三国名勝図絵」全 60 巻成る。各地の物産等も記載さる。此頃種子島のウシウマ 50 頭位あり。
296		○	1844	天保 15	山本莊兵衛藩庁より樟樹並びに諸木植付係を命ぜらる。
297		○	1845	弘化 2	冬、徳之島大飢饉にて餓死するもの多く、為に上納貢糖 2550013 斤の中 1842440 斤より出産なく島民困難を來す。
298		○	1846	弘化 3	4 月 5 日英国船 1 隻琉球に來り、医師其妻子通訳 4 人を留めて去る。
299		○	1846	弘化 3	秋、製菓館を中村騎射場に創立す。
300	○		1846	弘化 3	開聞岳の東麓、岡兒ヶ水の利右衛門(明治後前田利右衛門と追称)の墓畔に、その小頌徳碑を建てる。撰文は山川湊の佐々木広謙、河野通直である。
301		○	1848	嘉永 1	4 月 6 日、徳之島喜念港に米国船 1 隻來る。薪水を求む。日本近海測量に來りしものなりと。其士官とおぼしき者、山野を跋涉して草木を採集せりといふ。4 月 8 日、徳之島亀津に英国船 1 隻來る。日本近海測量の為なり。
302	○		1848	嘉永 1	6 月 6 日、佐藤成裕、号中陵、水戸で歿す、年 87。著書多く、1783 の項に挙げた 2 著の他に、『山海庶品』、『採菓録』、『飼籠鳥』、『中陵漫録』などがあり、他小著が数編ある。
303		○	1843-1848	天保 14-嘉永 1	薩侯の命に依り家老調所広郷菜種の改良を計り、山川、穎娃、知覧、小根占、川辺、加世田を初め各地に之を植えしめ、之に骨粉を用ふる事を創始す。楮を植へ紙の製造法を改良し美濃中国各地を視察し今の伊敷村玉里の紙屋谷に製紙場を設け紙の製造を奨励し又櫨の栽培、蠶の製法改良、桑園を開き養蚕をすすむ。又石炭探索に肥前より山子を備へり。(※原書では 1844 と 1845 の間に置く)
304		○	1849	嘉永 2	鹿児島尾畔山に諸禽供養塔及び衆鷹塚建立す。
305		○	1849	嘉永 2	島津公、前田杏齋を長崎に遣し、蘭医「モンニツク」に就き、種痘法を伝習せしむ。島津斉彬公牛痘苗を肥前に得て、子儔次郎当才に種痘し好果を得、広く藩内に施行す。
306		○	1849	嘉永 2	山本莊兵衛自費を投じて、川内新田神社境内に樟樹を植付く。
307	○		1850	嘉永 3	3 月、薩摩物頭名越左源太時敏、藩の内訌に連座して奄美大島へ流罪となり、1855(安政 2 年乙卯)6 月まで在留。その間見たことを書き綴る。その中に動植物を写生とともに書きとめることが多い。それらはのちに、『南島雑話』と題して伝えられる。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
308	○		1850	嘉永 3	この年、奄美大島で鼠大発生（名越左源太の記録）。
309	○		1850	嘉永 3	ルリカケス、「産地日本」として初めて学界に紹介される。奄美大島産。
310	○		1851	嘉永 4	島津斉彬、第 28 代薩藩主。
311		○	1851	嘉永 4	6 月、斉彬公、記録所に臨む、文書を閲し後命して弘く史料を蒐集し、家記、物産、風土史等を編纂せしむ。
312		○	1851	嘉永 4	8 月、城内の花園を撤し、薬剤、化学応用諸品の製作所となし、後、開物館と称す。同所に反射炉雛形を造設す。福岡の黒田侯に依頼し、石炭坑に付き経駅あるもの二人を傭ひ、長島、獅子島、甌島、種子島の坑脈を検し、試掘をなさしめ、炭質良好ならず、或は炭層薄くして採鉱の見込なし。依つて水車の利用法を研究せしむ。
313		○	1851	嘉永 4	島津斉彬公騎馬にて谷山に行き、鷹を放ち鶴 3 羽を得たり。
314	○		1851	嘉永 4	奄美大島の鼠の異常増殖やむ。
315		○	1852	嘉永 5	3 月 7 日島津斉彬公吉野にて雉 6 羽、猪、鹿 4 匹を射る。
316		○	1852	嘉永 5	反射炉建設に従事す。
317		○	1852	嘉永 5	8 月、勸農其他条令八章を書して、薩藩士民を諭す。
318		○	1852	嘉永 5	薩人、田原陶猗、肥後之国戒屋戎助を訪問し、聴き得たる人参育種法を一小冊子とし、之に「人参育種」と命名す。
319		○	1853	嘉永 6	此頃、艦船製造に付き後世の為、殖林の必要を感じ、日向国諸県郡高岡郷去川村の山中に大規模の造林に着手す。之薩藩にて船材用として造林をなしたる始めなり。
320		○	1854	安政 1	2 月、薩藩侍医、田宮尚施著「知幾葉言」成る。
321		○	1854	安政 1	3 月谷山の錫山より産出する錫を長崎、大阪、江戸に売りて其価甚高し。ここに於て、島津公其の得る所の千両を宰相公に献ず。
322		○	1854	安政 1	此年より、富山売薬行商人を 26 人に増加するの許可出づ。其後毎年同組合より鉛 150 斤、熊皮 10 枚を薩藩に献ず。
323	○		1855	安政 2	3 月 3 日、ドエーデルライン、ラインランドのベルグツァベルンに生まれる。
324	○		1855	安政 2	4-5 月、アメリカ合衆国の北太平洋探検船ヴィンセンス号他 4 隻、沖縄島から北上し、加計呂麻島、奄美大島、喜界島周辺を調査する。指揮官はロジャース (John Rodgers)、搭乗の動物学者スティンプソン (William Stimpson)、植物学者はライト (Charles Wright)。
325		○	1855	安政 2	米国捕鯨船鹿児島に入港す。
326		○	1855	安政 2	島津斉彬公、藩医数名を長崎に派遣し、和蘭学を修めしめ又長門の青木周鼎、大阪の緒方洪庵に就きて学ばしむ。又戸塚静海、坪井芳洲、川本幸民、石川格太郎を聘し医道及び蘭学を開き、これより医道は一新を見たり。又平素蘭学を斉彬公自ら研究し重要機密の事は往々洋文にて記述せり。蘭学講習所を鹿児島に設置す。尋で西洋通事を置き、緒方洪庵、川本幸民、杉田成郷等をして蘭書を訳せしむ。
327	○		1856	安政 3	8 月 22 日、田代安定、鹿児島に生まれる。
328		○	1856	安政 3	薩藩に製薬座を設け、配置売薬を藩にて取扱ふ事となる。
329		○	1856	安政 3	本邦殖林功労者、山本莊兵衛病歿す。
330	○		1857	安政 4	閏 5 月 7 日、川本幸民、薩摩の藩籍に入る。12 月教授職並。
331		○	1857	安政 4	8 月磯邸内に設けし反射炉、熔鉱炉其他の製作所を集成館と命名す。
332		○	1857	安政 4	常平倉に則り、島津斉彬公、儲穀の方法を著して藩内に分布す。

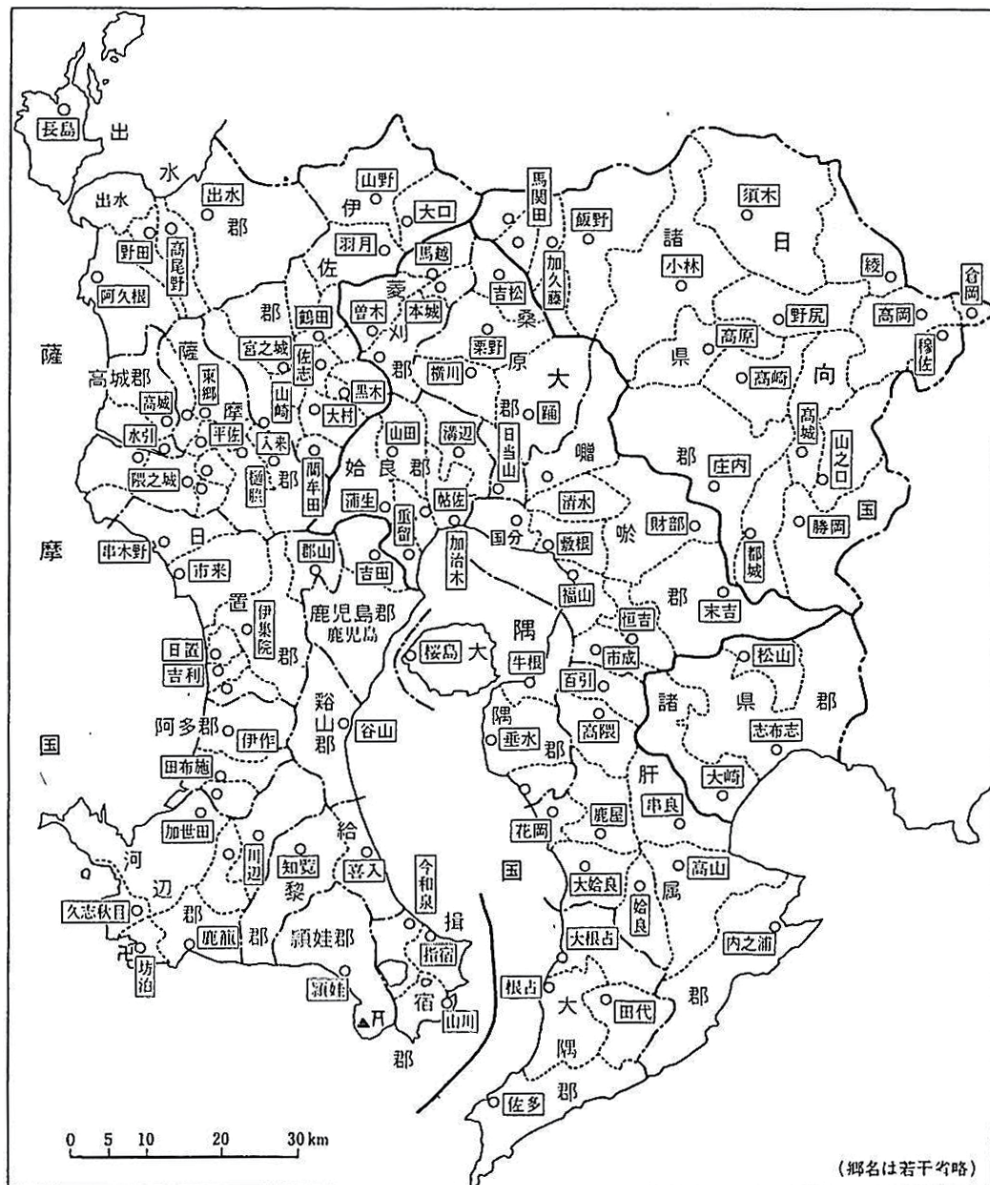
	上野	長井	西暦	和暦	事項
333	○		1857	安政 4	12月1日、箕作佳吉、江戸に生まれる。
334		○	1858	安政 5	八木称平、島津斉彬公の命に依り和蘭海軍医官ポンペ、ハン、メールデルホルトの種痘書を訳せし「散花小言」一冊成る。(※ポンペ・ファン・メールデルフォールト Pompe van Meerdervoort)
335	○		1858	安政 5	7月16日、島津斉彬、鹿児島帰国中、急病死行年50。藩主の地位にあること7年半。
336	○	○	1858	安政 5	7月、田原直助、『宇藩出産考』6巻と附録を作る。宇和島藩内の植物270種および鉱石を記述、動物なし。直助はこの年、鉄砲製造指導のため宇和島藩に滞在していた。 【長】8月薩人田原明章(陶猗)宇和島藩にありし時、「宇藩出産考」なるものを著す。草部3巻、木部2巻、鉱石部1巻なり。主として草木の主治及び製法を述べ且つ藩内にて採集し得べき地を指示せり。
337	○		1858	安政 5	田原明章(直助)、『草政策硝法』の稿を起す。
338		○	1858	安政 5	田宮尚施著「暴病管見」新刻成る。
339		○	1858	安政 5	薩摩製薬座収支償はず。富山売薬薩摩組合に引渡せり。
340		○	1860	万延 1	富山売薬薩摩組合より昆布4千貫を船を以て藩公に献上す。
341		○	1862	文久 2	10月、磯集成館向江屋敷に鑄銭局を設け、旺んに琉球通宝を製造す。
342		○	1863	文久 3	福山吉野両牧廃止さる。
343		○	1863	文久 3	富山売薬薩摩組合、煙硝294メ220匁を信州飛騨より買ひ集め薩侯に献上す。
344		○	1864	文久 4	薩藩朝より朴正官に命じて、仏国博覧会に、錦手焼大花瓶を製作品せしむ。之より薩摩陶器の名海内に響く。
345	○		1865	慶応 1	11月29日、伊藤篤太郎、東京に生まれる。[1941、(昭和16辛巳)3月21日歿、年76]
346		○	1865	慶応 1	比志島野牧廃止さる。
347		○	1865	慶応 1	長崎の英人某、島津家に装蹄、去勢馬を献上す。栗毛洋馬1頭なり。
348		○	1866	慶応 2	肥前五島、薩摩より甘藷移植さる。
349		○	1866	慶応 2	7月、「吉野御薬園地へ草木植付留」と題する記録成る。杜荊1本、山茶花4本、桂木21本、其他薬草木129種を記載す。右記録に依れば薬園の広さは77間と41間の面積を有し二段になり居し如く思考さる。
350	○		1867	慶応 3	田原直助、薩摩藩軍賦役頭取、鉄砲弾薬製造供給の全責任者として、戊辰の役に際し活躍(1868年参照)。
351	○		1867	慶応 3	下野国足利の求道館、上海版漢訳『植物学』(清、咸豊8年、1858刊)の翻刻版刊行。
352	○		1868	慶応 4 / 明治 1	3月28日、神仏混淆の禁止、これに伴う排仏毀釈は薩摩で徹底的に実施。
353	○	○	1868	慶応 4 / 明治 1	4月、田原直助が漢訳『植物学』(1867参照)を和文に抄訳した『植物学抄訳』8巻成る。刊行は1875。(※長井版は『植物学抄訳』5冊とする。)
354	○		1868	慶応 4 / 明治 1	7月17日、江戸を東京と改称。
355	○		1868	慶応 4 / 明治 1	9月8日、明治と改元。
356		○	1868	慶応 4 / 明治 1	種子島のウシウマ60頭に達す。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
357		○	1868	慶応4 / 明治1	長島野牧廃止さる。
358		○	1870	明治3	大島、徳之島地方天然痘流行し徳之島は男女 2000 余人死亡す。
359	○		1871	明治4	7月、廃藩置県。
360		○	1871	明治4	廃藩と共に吉野、山川、佐多御薬園取止めとなる。
361		○	1871	明治4	鹿児島県発行「博物新編」3冊出版さる。
362	○		1872	明治5	11月9日、太陽暦を採用。
363		○	1872	明治5	種子島、芦屋野牧廃止に当り、ウシウマは島中の貧民に給与さる。(現在本獣は天然記念物に指定せられ種子島に12頭、東京上野動物園に1頭あり)。
364	○		1873	明治6	田原直助、軍事視察のため欧州へ出張、英京で英語の学修に植物学書を用いる。
365		○	1873	明治6	種子島西の表の人、西村守人、武田龍蔵の兩人試みに種子島の牛3頭を馬毛島に放牧し成績佳良なり。
366		○	1873	明治6	大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、与論島出産糖惣買上げ廃止せらる。
367	○		1874	明治7	田代安定、東上して博物局に入り、田中芳男に就いて植物学を学ぶ。
368	○		1875	明治8	田原直助の『植物学抄訳』刊。原本の漢訳『植物学』は、英人リンドレーの『植物学要綱』を韋廉臣が訳し李善蘭が筆述したものである。
369		○	1874-1875	明治7、8	鹿児島県の農事社長知識兼雄、和蘭豚牡2頭を輸入す。
370	○		1877	明治10	4月12日、東京大学開学、理学部に生物学科を設ける。教授は植物学矢田部良吉、動物学者米人モース (Edward S. Morse)、9月開講。
371	○		1858	安政5	この年、田代安定、『紀州採葉記』を作る。
372	○		1879	明治12	5月、東京大学お雇い教師、アメリカ人動物学者エドワード・モース、鹿児島湾の海底および海岸の動物を採集する。
373	○		1879	明治12	陰暦6月、田代安定、鹿児島湾の喜入海岸でメヒルギの大群落を発見する。
374	○		1879	明治12	11月12日、ドイツ人ルートヴィヒ・ドューデルライン (Ludwig Döderlein)、東京大学お雇い教師、医学部で動植物学を講ず。
375	○		1880	明治13	5月、田代安定帰薩、鹿児島県庁に勤務。
376	○	○	1880	明治13	8月、ドューデルライン、高松数馬を伴い、主として魚類採集のため奄美大島へ渡る。田代安定、鹿児島より同行。15日、名瀬上陸、湯湾岳登山後、加計呂麻島の瀬武を根拠地として海産動物を採集、8月31日名瀬出航、鹿児島を経て9月9日東京に帰着。 【長】独逸の学者、ドクトル、デーテルライン [魚類専門家] 8月鹿児島県下大島に赴き、16日間逗留し、動植物探究に従事す。此時、鹿児島の人田代安定常に同行し、嚮導の任に当れり。当時の状況は Ueber die Flora der Luikiu Inseln といへるデイ氏の論文に詳細なり。
377	○	○	1881	明治14	2月、青江秀編著の『薩隅煙草録』を鹿児島県が刊。
378		○	1881	明治14	明治大帝、四の橋の薩侯の別邸に臨幸、島津家に伝ふる犬追物を天覧あり。終つて袖ヶ崎邸に躑躅を天覧あり。
379	○		1881	明治14	12月21日、ドューデルライン契約満期により帰国す。この年“Amami-Oshima”の1文を発表し、動物分布上、旧北区と東洋区との境界は、奄美大島と九州南方の種子、屋久両島との間にあるべきことを示唆する。
380	○		1882	明治15	田代安定、農商務省の命により、キナノキ移植のため沖縄島に渡る。

	上野	長井	西暦	和暦	事 項
381	○		1882	明治 15	12 月、箕作佳吉、東京大学教授、動物学担任、26 歳。
382	○	○	1883	明治 16	鹿児島県、彩色魚貝図『魔海魚譜』を作る。作者は県職員白野夏雲、描画者は木脇啓四郎、二木直喜。この年東京市上野公園で開催の水産博覧会出品のため。別に同じ魚貝図を銅版に製した上下 2 巻本を刊行する。 【長】鹿児島県編輯「魔海魚譜」成る。明治十六年の水産博覧会の為、白野夏雲が出品の料として編纂を命ぜられたるものにして、2 冊よりなり 325 種記載さる。
383		○	1883	明治 16	5 月政府は馬毛島の羊の試牧を廃し、全部牧羊舎に払下ぐ。
384	○		1883	明治 16	田代安定著『鹿児島県草木誌内篇』成る。
385	○		1884	明治 17	2 月、田代安定、ロシアへ出張を命ぜられ、聖ペテルブルグで開催の植物学園芸学国際会議出席する。終了後、露都に滞在し、植物学者マクシモヴィッチ (Carl Maximowicz) の許で、植物を研修、この年の末に帰日。
386	○		1884	明治 17	伊藤篤太郎、英国ケンブリッジ大学入学、ヴァインズ (S. H. Vines) とフランス・ダーウィン (Francis Darwin) に就いて植物生理学を、ロンドンのキュー植物園で、フッカー (J. D. Hooker) に就いて植物分類学を修める。
387	○		1884	明治 17	東京大学お雇教師、地質学者、ドイツ人ブラウンス (David Brauns)、哺乳類により、旧北、東洋両動物区の境界を、種子屋久両島と奄美大島との間におくべきことを提唱する。
388		○	1885	明治 18	川端梓著「養蚕手引草」出版さる。
389	○		1889	明治 22	伊藤篤太郎帰日。
390	○		1894	明治 27	3 月、伊藤篤太郎、鹿児島高等中学校造士館教授、1896 年 9 月まで在任、その間琉球植物を研究する。
391	○		1896	明治 29	3 月 29 日、帝国大学教授箕作佳吉、原十太を伴い鹿児島着、4 月にかけて鹿児島湾を中心として、海産動物を採集する。
392	○		1896	明治 29	12 月 21 日、田原陶猗 (直助) 鹿児島で歿す、年 84。
393	○		1896	明治 29	アマミノクロウサギ捕獲 (最初の標本)。
394	○		1897	明治 30	2 月、田代安定、台湾総督府技師、熱帯有用植物の調査研究に従事 [1928 (昭和 3 年 3 月 16 日) 鹿児島滞在中歿、年 73]
395	○		1899	明治 32	2 月 23 日、木脇啓四郎、鹿児島で歿、年 85。『魔海魚譜』の描画家の 1 人。(1817 参照)
396	○		1899	明治 32	9 月 8 日、白野夏雲、札幌で歿、年 73。1890 (明治 23) 以来、札幌神社宮司。鹿児島県在職時代、『魔海魚譜』の編纂に従事 (1883 参照)。
397	○		1900	明治 33	ストーン (W. Stone)、アマミノクロウサギに学名を与える。
398	○		1901	明治 34	[3-4 月、箕作佳吉、奄美大島へ渡り海産動物を採集。3 月 25 日名瀬に上陸、加計呂麻島との間の瀬戸で採集に従事、のち沖縄島に航し、4 月 23 日鹿児島に帰着。]

参考文献

- 上野益三（1982）『薩摩博物学史』島津出版会。
- 岡田雅志・柳澤雅之編（2020）『CIRAS Discussion Paper 97 アジアの薬用植物資源の生産・流通・利用の歴史に関する学際的研究—シナモンがつなぐベトナムと日本—』京都大学東南アジア地域研究研究所。
- 鹿児島市編（1935）『薩藩の文化』鹿児島市教育会。
- 鹿児島市史編さん委員会編（1969）『鹿児島市史 第1巻』鹿児島市。
- 末永一（1955）「故岡島銀次先生を憶う」『昆蟲』23(2)、pp. 43-44。
- 高津孝（2017）『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』平凡社。
- 長井實孝編（1934）『薩摩藩博物学年表』鹿児島高等農林學校，鹿児島高等農林學校創立廿五周年記念會編『鹿児島高等農林學校開校廿五周年記念論文集』鹿児島高等農林學校：鹿児島高等農林學校創立廿五周年記念會。
- 内藤喬編（1937）『薩藩の薬園と本草学』手稿本。



江戸時代郡郷図（熊毛・馭謨・甕島の三郡と大島を除く）
 (出典) 芳即正『人物叢書 191 調所広郷』吉川弘文館、1987年、89頁